

平成 18 年度薬物相互作用クイズ配信一覧

No.	タイトル	事例配信日
1	金属カチオン製剤は薬物の効果に影響を及ぼすか。	2006/6/5
2	処方作成時に見落としがちな「複合副作用」	2006/7/3
3	この飲み合わせ大丈夫？ 下痢止め効果は期待できるか？	2006/7/31
4	オランザピン（ジプレキサ）、テオフィリン（テオドールなど）服用患者の禁煙時は要注意！	2006/8/28
5	解熱鎮痛剤（イブプロフェン）で作用が減弱する可能性のある薬剤は？	2006/10/23
6	胃の動きを良くするプリンベラン、併用薬との飲み合わせは大丈夫？	2006/11/20

平成 18 年度相互作用コンサルティング事例

No.	タイトル	事例配信日
1	緑茶がワルファリンの効果を左右する？	2006/4/10
2	コルヒチンとクラリスの併用を中止したのは妥当か？	2006/9/25
3	グレープフルーツを食べてもなんともないバイミカード服用患者	2006/12/18
4	クラリシッドとテオドールの併用は問題ないか？	2006/1/15
5	イトリゾール内用液はなぜ空腹時服用？ いったいつから食事摂取が可能なのか？	2007/2/10
6	パキシルを漸減中のロプレゾールの投与量調節法は？	2007/3/1

平成 19 年度 ヒヤリハット事例

題名	配信日
1 非定型抗精神病薬による体重増加に気がつかなかった	2007.04.02
2 スピリーバ吸入カプセルがシートから取り出せなかった患者	2007.04.16
3 デパケン錠服用中の患者が服薬コンプライアンス不良、一包化にするには？	2007.04.23
4 緑内障の患者にセレスタミンを処方してしまった	2007.04.27
5 自家用車で通勤している患者にアベロックスを投与するときは？	2007.05.14
6 フルカムとロルカムを頭の中で混同	2007.05.21
7 "カネボウ当帰芍薬散料"と"ツムラ当帰芍薬散"、同じものと思いこんだ医師、薬剤師	2007.05.28
8 マイジェクターを 2 単位/日盛から 1 単位/日盛に変更して患者が混乱	2007.06.11
9 チザノン<アシノンの後発品>のつもりでチザニン<テルネリンの後発品>を処方して しまった	2007.06.18
10 併売のモーラステープでも包装の違いで治療効果に差があると思ひこんだ患者	2007.06.25
11 一回量包装の指示によってロベミンが 14 日連続投与となってしまった	2007.07.09
12 チラーチン末とチラーチン S は同じものと思って処方してしまった	2007.07.13
13 がん化学療法施行中に G-CSF を投与してはいけない？	2007.07.23
14 一包化と PTP シート調剤が混在したため重複服用してしまった患者	2007.08.06
15 COX-2 選択的な NSAIDs であっても消化性潰瘍患者には要注意	2007.08.13
16 ニコチネル TTS を切るように指示してしまった	2007.08.20
17 ボナロン 35 mg 錠服用後、210 分間なにも食べなかった患者	2007.09.03
18 妻に処方された「ツムラ猪苓湯」を入浴剤と勘違いして利用しようとした患者	2007.09.10
19 服用日指定のデモダールの日付を間違えてしまった	2007.09.14
20 今までとシートデザインが異なるエビスタ錠（2 社からの併売品）を交付され不信感 を抱いた患者	2007.10.01
21 薬剤性排尿困難の既往患者に対してチアトンを処方してしまった	2007.10.05
22 高体重の小児に成人常用量の二倍のセフゾン細粒を処方してしまった	2007.10.15
23 母親がテオドール錠を粉砕して子供に服用させ、興奮・手の震え	2007.10.22
24 医師・薬剤師が、ウブレチドに起因する副作用（下痢）を長期間にわたって見過ごし ていた複合的要因	2007.10.29
25 皮膚科からガスターが処方されるとは思わなかった	2007.11.05
26 検査データの日付を勘違いしてインスリンを過量投与しそうになった	2007.11.12
27 用法変更による患者負担金の違いから、患者とトラブルに	2007.11.26
28 高齢の患者に生じた幻覚の原因はファモチジン？	2007.12.03
29 処方箋の訂正をめぐる薬局とトラブル	2007.12.11
30 副作用の説明不足と薬剤情報提供文書の記載から患者が不信感	2007.12.21
31 苓桂朮甘湯を事務員が誤入力	2007.12.28
32 便の中から発見された錠剤の正体は？	2008.01.07
33 ユーエフティからティーエスワンへの切り換えにも休業期間が必要	2008.01.21
34 サンリズムのつもりでザンタックを誤入力	2008.01.28
35 キプレスチュアブルによる悪夢の発現を見落としていた	2008.02.04
36 ビソルボンの代謝物の一つがムコソルバン！両剤の併用処方の問題ないか？	2008.02.08
37 入院患者の持参薬の処方内容を確認せずに Do 処方してしまった	2008.02.22
38 セレネース錠、1.5 mg 錠より 3 mg 錠が小さいことを知っていれば、服薬ノンコン プライアンスが防げたはず！	2008.03.03
39 糖尿病治療薬の粉砕、乳糖で賦形しても大丈夫？	2008.03.10
40 コンバントリンドライシロップの服用間隔が患者に伝わっていなかった	2008.03.24
41 アドナの止血作用とアスピリンの抗血小板作用は拮抗するのか？	2008.03.31

平成 19 年度 薬物相互作用クイズ

題名	配信日
1 見落としがちな相互作用！ 治療効果が弱まってしまう薬物併用の組み合わせはどれ？	2007.04.09
2 ポリフル・コロネル<ポリカルボフィルカルシウム>との飲み合わせが問題となる薬剤は？	2007.06.04
3 パキシルとの併用に注意すべき薬剤は？	2008.03.17

平成 19 年度 薬物相互作用コンサルティング事例

題名	配信日
1 ミカルティスとバイミカードの併用は問題ないのか	2007.05.07
2 チラーチン S の効果減弱の原因は？	2007.07.02
3 ベネット錠服用 30 分後に牛乳を飲んでもよいか？	2007.07.30
4 イレッサとパリエットの併用は問題ないか？	2007.08.27
5 コーヒー中のカフェインとテオフィリンの飲み合わせを気にしていますか？	2007.09.21
6 ミコフェノール酸モフェチルと鉄剤の併用は避けるべきか？	2007.11.19
7 リファジンによるグリミクロンの効果減弱の程度は？	2007.12.17
8 チラーチン S とスローフィー、酸化マグネシウムの併用は問題ないか？	2008.01.11
9 イトラコナゾールとプロトンポンプ阻害薬の相互作用	2008.02.18

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年
澤田康文, 大谷壽一, 堀里子, 三木晶子 著 澤田康文 監修	NPO 法人医薬品ライフタイム マネジメントセンター 編	薬剤師のための徹底リスク マネジメント	南山堂	東京	2007

※注 上記の論文は、本研究の過程で作出した教育的臨床事例を報告したもので、研究成果そのものを取りまとめて報告したものではないが、重要な成果であるのでここに掲載する。

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
澤田康文	全国薬剤師間情報交換研修システム（アイフィ ス）による医薬品適正使用・育薬の推進	日病薬誌	43	167-170	2007

※注 以下の論文は、当システムにより収集された事例・症例を報告したものや、本研究の過程で作出した教育的臨床事例であり、研究成果そのものを取りまとめて報告したものではないが、重要な成果であるのでここに掲載する。

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
斉田翠美, 井上綾子, 石橋久, 富永宏治, 堀 里子, 三木晶子, 大谷 壽一, 高木淳一, 小野 信昭, 澤田康文	患者を対象としたケトプロフ エンテープの使用感に関する 製剤間比較調査	薬学雑誌	印刷中		2008
S. Hori, N. Matsuo, A. Yamamoto, T. Hazui, H. Yagi, M. Nakano, Y. Suzuki, A. Miki, H. Ohtani and Y. Sawada.	Piloerection induced by replacing fluvoxamine with milnacipran.	Br. J. Clin. Pharmacol	63(6)	665-671	2007
Tsuda A, Fujiyama J, Miki A, Hori S, Ohtani H, Sawada Y	The first case of phenytoin intoxication associated with the concomitant use of phenytoin and TS-1, a combination preparation of tegafur, gimeracil, and oteracil potassium	Cancer Chemother Pharmacol.	e-Pub / in press		2007
松尾 律子, 田中 祥子, 加納 美知子, 磯野 喜 美子, 田中 泰羽, 田浦 智子, 浅田 由貴, 赤嶺 有希子, 沢井 一, 木下 正和, 須藤 智美, 久野 木 良子, 三木 晶子, 堀 里子, 佐藤 宏樹, 大谷 壽一, 澤田 康文	クラリスロマイシンドライシ ロップと各種カルボシステイ ン製剤併用時の苦味強度にお ける先発医薬品と後発医薬品 間の違い	薬学雑誌	128(3)	479-485	2008
澤田康文	ヒヤリハット事例に学ぶ	日経ドラッグインフォメーション	2005年 5月号	28-29	2005
澤田康文	ヒヤリハット事例に学ぶ	日経ドラッグインフォメーション	2005年 7月号	40-41	2005
澤田康文	ヒヤリハット事例に学ぶ	日経ドラッグインフォメーション	2005年 9月号	35-36	2005
澤田康文	ヒヤリハット事例に学ぶ	日経ドラッグインフォメーション	2005年 11月号	36-37	2005
澤田康文	ヒヤリハット事例に学ぶ	日経ドラッグインフォメーション	2006年 1月号	36-37	2006
澤田康文	ヒヤリハット事例に学ぶ	日経ドラッグインフォメーション	2006年 3月号	32-33	2006
澤田康文	ヒヤリハット事例に学ぶ	日経ドラッグインフォメーション	2006年 5月号	39-40	2006

澤田康文	ヒヤリハット事例に学ぶ	日経ドラッグインフォメーション	2006年 7 月号	43-44	2006
澤田康文	ヒヤリハット事例に学ぶ	日経ドラッグインフォメーション	2006年 9 月号	32-33	2006
澤田康文	ヒヤリハット事例に学ぶ	日経ドラッグインフォメーション	2006年 11 月号	39-40	2006
澤田康文	ヒヤリハット事例に学ぶ	日経ドラッグインフォメーション	2007年 1 月号	31-33	2007
澤田康文	ヒヤリハット事例に学ぶ	日経ドラッグインフォメーション	2007年 3 月号	36-37	2007
澤田康文	ヒヤリハット事例に学ぶ	日経ドラッグインフォメーション	2007年 5 月号	43-45	2007
澤田康文	ヒヤリハット事例に学ぶ	日経ドラッグインフォメーション	2007年 7 月号	48-49	2007
澤田康文	ヒヤリハット事例に学ぶ	日経ドラッグインフォメーション	2007年 9 月号	47-48	2007
澤田康文	ヒヤリハット事例に学ぶ	日経ドラッグインフォメーション	2007年 11 月号	42-44	2007
澤田康文	ヒヤリハット事例に学ぶ	日経ドラッグインフォメーション	2008年 1 月号	43-45	2008
澤田康文	ヒヤリハット事例に学ぶ	日経ドラッグインフォメーション	2008年 3 月号	52-53	2008
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (44)	ふくおか県薬会報	18 (4)	266-272	2005
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (45)	ふくおか県薬会報	18 (5)	335-340	2005
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (46)	ふくおか県薬会報	18 (6)	429-433	2005
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (47)	ふくおか県薬会報	18 (7)	503-510	2005
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (48)	ふくおか県薬会報	18 (8)	575-580	2005
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (49)	ふくおか県薬会報	18 (9)	668-674	2005
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (50)	ふくおか県薬会報	18 (10)	746-754	2005
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (51)	ふくおか県薬会報	18 (11)	808-814	2005
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (52)	ふくおか県薬会報	18 (12)	839-844	2005
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (53)	ふくおか県薬会報	19 (1)	45-50	2006
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (54)	ふくおか県薬会報	19 (2)	99-105	2006
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (55)	ふくおか県薬会報	19 (3)	158-163	2006
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (56)	ふくおか県薬会報	19 (4)	243-249	2006
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (57)	ふくおか県薬会報	19 (5)	305-313	2006
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (58)	ふくおか県薬会報	19 (6)	398-403	2006
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (59)	ふくおか県薬会報	19 (7)	471-477	2006
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (60)	ふくおか県薬会報	19 (8)	548-553	2006
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (61)	ふくおか県薬会報	19 (9)	638-644	2006
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (62)	ふくおか県薬会報	19 (10)	705-710	2006
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (63)	ふくおか県薬会報	19 (11)	774-780	2006
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (64)	ふくおか県薬会報	19 (12)	839-844	2006
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (65)	ふくおか県薬会報	20 (1)	41-46	2007
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (66)	ふくおか県薬会報	20 (2)	95-102	2007

澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (67)	ふくおか県薬会報	20 (3)	153-160	2007
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (68)	ふくおか県薬会報	20 (4)	247-253	2007
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (69)	ふくおか県薬会報	20 (5)	311-315	2007
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (70)	ふくおか県薬会報	20 (6)	405-411	2007
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (71)	ふくおか県薬会報	20 (7)	486-492	2007
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (72)	ふくおか県薬会報	20 (8)	552-561	2007
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (73)	ふくおか県薬会報	20 (9)	638-643	2007
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (74)	ふくおか県薬会報	20 (10)	718-722	2007
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (75)	ふくおか県薬会報	20 (11)	786-790	2007
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (76)	ふくおか県薬会報	20 (12)	822-826	2007
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (77)	ふくおか県薬会報	21 (1)	41-45	2008
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (78)	ふくおか県薬会報	21 (2)	107-112	2008
澤田康文	「ヒヤリ・ハット」と「処方チェック」の実際 (79)	ふくおか県薬会報	21 (3)	164-168	2008
澤田康文	東大・薬剤師会「育薬セミナー」	市薬ジャーナル (福岡市薬剤師会会報)	133	46-56	2007
澤田康文	東大・薬剤師会「育薬セミナー」	市薬ジャーナル (福岡市薬剤師会会報)	134	46-54	2007
澤田康文	東大・薬剤師会「育薬セミナー」	市薬ジャーナル (福岡市薬剤師会会報)	135	31-40	2007
澤田康文	東大・薬剤師会「育薬セミナー」	市薬ジャーナル (福岡市薬剤師会会報)	136	19-25	2007
澤田康文	東大・薬剤師会「育薬セミナー」	市薬ジャーナル (福岡市薬剤師会会報)	137	25-35	2008
澤田康文	東大・薬剤師会「育薬セミナー」	市薬ジャーナル (福岡市薬剤師会会報)	138	20-28	2008

全国薬剤師間情報交換研修システム(アイフィス)による 医薬品適正使用・育薬の推進

東京大学大学院情報学環・薬学系研究科 (医薬品情報学)
澤田 康文 Yasufumi SAWADA

薬剤師の仕事は、「処方せんチェック」、「薬の調製・調合とそのチェック」、「医薬品管理」、「服薬指導」、「医薬品情報提供活動」など、多岐にわたっている。近年、薬物療法においては切れ味のよい新薬が開発されたり、テーラーメイドの薬物治療が推し進められるなど、目を見張る進歩がある。このような複雑化、高度化した薬物療法が行われている一方で、いつインシデント・アクシデントが起こっても決して不思議ではない、それだけぎりぎりのところで薬剤業務が展開されているといえるだろう。そのようななかでも薬剤師は、薬物治療のあらゆる場面で「最後の砦」としてアクシデントを未然に防がなければならない。

に対して薬剤師が疑義照会をしないで処方のままに調剤した結果、患者に有害事象が発生したという事例に対して、医師ばかりでなく薬剤師も責任を問われ、患者に対して損害賠償を命じる判決がくだされている(処方せんチェックのインシデント・アクシデント)^{1,2)}。さらに、おそらく近い将来、薬剤師の行う服薬指導が不備であることによって起こるトラブルを患者が訴えることだって起こるかもしれない(服薬ケアのアクシデント)³⁾。このほかにも、医薬品管理、薬歴管理、医薬品情報提供の場面でもトラブルは起こっている。

インシデント・アクシデント事例から学べ!

インシデント・アクシデントが起こる 3つの場面とは?

薬剤業務において薬剤師が社会から高く評価される場面、さらに薬剤師の責任が問われる場面にはどのようなものがあるのだろうか?(図1)

まず、別物調剤に代表されるような調剤(薬の調製・調合)のミスがある(一般調剤のインシデント・アクシデント)¹⁾。これは、薬剤師がきちんとやらなければならない最低限の業務であるから、責任を問われるのは当然であろう。一方、昨今、医師が書いた不適正な処方せん

では、このような薬剤師が関与する業務ミスなどはどのようにすれば防げるのであろうか。よく、いったん起こってしまった「アクシデント(マスコミで発表されてしまうような重大な有害事象を伴う)から学ぶ!」ことが提唱され、同じ内容のアクシデントを確実に回避するための方策がただちに講じられる。最近では、それに対して航空事故と同じような調査委員会を設置するとの考えも提唱されている。しかし、これでは不十分であると考える。なぜならば、重大なアクシデントに至った事例は氷山の一角で、背後には報道・報告に至らなかった多数のインシデント(傷害のないトラブル、ヒヤリハットと一般的に呼ばれる)事例があり、その背後には極めて多くの不安行動、不安全状態があると考えるのが一般的だからである。ここで注意すべきことは、致命的なアクシデント、軽度のアクシデントやインシデント体験、不安行動、不安全状態も突き詰めれば要因はすべて同じということである。取り返しのつかない結論に至ったか、至らなかったかの違いだけなのである。顕在化しないほどの小さなトラブルを見逃したり、軽視して放っておくと、いずれ大きなアクシデントが生じる危険性が高いのである。従って、最も効率がよい方法は、内容の多様性もその量もアクシデント事例よりも遥かに富んでいる「インシデント事例」などを徹底的に収集してそれらに学び、同内容のインシデントやアクシデントを絶対に起こらな

A. 社会から高く評価される場面 適正使用、危険回避

- ☆ 薬品情報の提供の充実
 - グッド・ベター・ベストな処方設計支援
- ☆ 処方せんチェックの充実
 - ミスのある処方からグッドな処方への変更
 - ベター・ベストな処方へ変更
- ☆ 服薬指導の充実
 - 使用法の間違いを回避
 - 服薬コンプライアンスの改善
 - 薬理効果のチェック
 - 有害作用の発見
- ☆ 情報収集・評価の充実
 - 市販後臨床試験への参画
 - エビデンスの収集・評価・解析
- ☆ 正確な調製・調合

B. 社会から責任を問われる場面 医療ミス、投薬ミス、調剤ミス

- ☆ 薬品情報の提供のミス
 - × グッド・ベター・ベストな処方設計支援ができない
- ☆ 処方せんチェックのミス
 - × ミスのある処方からグッドな処方への変更ができない
 - × ベター・ベストな処方へ変更ができない
- ☆ 服薬指導のミス
 - × 使用法の間違いを回避ができない
 - × 服薬コンプライアンスが改善できない
 - × 薬理効果のチェックができない
 - × 有害作用の見落とし
- ☆ 調製・調合のミス

図1 薬剤師に対する社会的評価

総説

いように回避することである。さらに、これにより未だアクシデントに至っていない事象の原因をも事前に見出すことが可能となり、対策を講ずることで、アクシデントの再発防止や未然防止も可能になると考えられる。

インシデント・アクシデント事例の収集がキー！

インシデント・アクシデント事例は誰が収集するのであろうか？ 全国医療現場で活躍する16万人の薬剤師がそれを担うのは当然であろう。薬剤師がリスクマネージャーとしての役割を存分に発揮できるようになるためには、このような事例により多く触れ、その防止法や解決法を習得しながらスキルアップしていくことが不可欠である。しかし、個々の薬剤師が実際に経験する事例は限られているし、各医療機関で起こっている事例は公にされることは少なく、さらに、各事例について詳細に検討を加え、それらを全国の薬剤師間で共有し、薬剤師の知識・技能・態度の習得と研鑽に役立てるという取り組みはほとんど行われていないし、仕組みも構築されていない。薬剤師自身、研鑽を積むための優れた教材が少ないことも問題である。従って、医療現場で起こるありとあらゆるインシデント・アクシデント事例を積極的に捉えるという日々の心がけと、効率良く収集するためのシステム作りは、どちらも極めて重要である。

アイフィスとは何？ その役割は？

我々は全国の薬剤師から多種多様なインシデント・アクシデント事例を収集し、解析することによって新規情報を付帯させて医療現場にフィードバックする取り組みを行っている。2000年12月に立ち上げ、すでに薬剤師会員8,000名以上を擁する「全国薬剤師間情報交換・研修システム」(以下、アイフィス；internet based pharmacist's information sharing system：i-PHISS)がそれである(図2)(登録方法は本稿末尾を参照)。

アイフィスでは投稿された事例を次の要素ごとにシステマティックに解析し、磨きのかかった研修用事例として全国の会員薬剤師にフィードバックしている。

- (1) 何がどのような過程で起こったか？
- (2) なぜ起こったか？
- (3) 二度と起こさないために個人として、薬

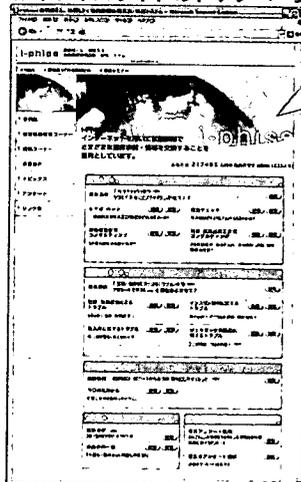
局(薬剤部)内システムとして今後どう対応するか？ アイフィスには「インシデント(ヒヤリハット)事例」コーナーのほか、「処方チェック事例」コーナー、相談コーナーとして、処方せん上の薬物相互作用の疑問に関する「薬物相互作用コンサルティング事例」や薬剤業務全般にわたる疑問に関する「医薬品適正使用・育薬コンサルティング事例」の4つのカテゴリに分類された事例集が整備されている。収集された新規事例はこれまで1,000例を超え、そのなかから少なくとも毎週1事例ずつ電子メールで配信されるとともに、その詳細版をアイフィスのウェブサイトでも公開している。アイフィスのサイトにはすでに約300例以上が公開されており、いつでも閲覧可能となっている。配信事例は、投稿された事例を基に徹底的な調査・解析が付加されている。アイフィスを活用することで、全国のどこかで起こったインシデント・アクシデントの新たな発見を研修用事例として多くの薬剤師が共有することが可能になるのである。アイフィスでは、事例の収集などを通じて医療現場における様々な問題点を掘り起こし、医薬品の適正使用を目指した働きかけを積極的に行っている。

アイフィスから育薬研究へ発展！

次にアイフィスの「育薬」とのかかわりについて述べよう(図3)。

医薬品は多くの患者に適用されてはじめて明らかになることが少なくない。具体的には、種々の疾患に対するより適切な新しい使用法や使用上の注意、創薬の段階では見出せなかった大きな個人差、有害作用・薬物相互作用

アイフィスサイトのトップページ



- ＜医薬品適正使用・育薬情報コンテンツ＞
医薬品適正使用の実態を把握する！
育薬研究テーマを提案する！
- ・問題ある処方(エビデンス)事例
 - ・投薬ミス・ヒヤリハット(エビデンス)事例
 - ・使用・処方の実態調査
 - ・調剤の実態調査
 - ・医薬品適正使用への提案
 - ・育薬への提案と実施

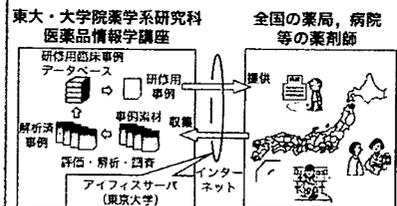


図2 アイフィスサイトのトップページとしくみ

現場での医薬品のプロダクトライフサイクルマネジメント業務の場としてアイフィスを活用し、アイフィスから創出された研修事例を日々の薬剤業務に役立てていただきたい。今後も本システムを永続的に運用していくことで、基礎薬学的知識を薬物治療に活かすための臨床薬学的スキルと現場での問題点を発見し解決するスキルを兼ね備えた薬剤師養成の研修システムとして、リアルタイムに市販後の新規の医薬品情報を捉えるシステムとして、アイフィスが活用されることを目指している。一方で、これらの貴重な事例が薬剤業務のプロセスごとに規格化・標準化され、データベースとして全国レベルで蓄積されライブラリー化されることになれば、その有効活用によってミスの事前予測も可能となると考えている。正に、薬剤業務の危機管理文化の糧となるのである。これらの活動によって適正でかつ的確な「インシデント・アクシデントのない薬剤業務」が展開されることになれば、我々としては望外の喜びである。

引用文献

- 1) 澤田康文：「薬学と社会」, じほう, 2001.
- 2) 澤田康文：「処方せんチェック虎の巻」, 日経BP, 2003.
- 3) 澤田康文：「ヒヤリハット事例に学ぶ服薬指導のリスクマネジメント」, 日経BP, 2005.
- 4) 大谷壽一ほか：インターネットを用いた薬剤師間情報交換・研修システムの構築と運用(1), 薬学雑誌, 122, 185-192 (2002).
- 5) 澤田康文：医薬品ライフタイムマネジメントとは何か?, 学術月報, 57, 284-288 (2004).

■アイフィス会員登録申請方法

以下のURLから会員登録窓口にお入りください。
<http://iphiss.jp/i-phiss/i-phiss.html>

*当サイトは医療現場で業務を行う薬剤師限定となっておりますので、それ以外の方は入会できません。

■ビデオオンデマンド (VOD) 育薬セミナー受講方法

以下のURLの登録窓口から先行予約も可能です。
<http://www.dlmc.jp>

*当セミナーは、薬剤師、製薬企業と卸企業の方、大学教員などが対象となっております。

新刊紹介

2007年版
 新入局病院診療所薬剤師
 研修テキスト

編集：(社)大阪府病院薬剤師会
 発行：株式会社じほう
 定価：2,835円 (税込), B5判, 179頁



薬学部生は実務家教員の増加により、病院薬剤師の業務を聴く機会が増えた。しかし、限られた時間内に病院薬剤師業務のすべてを理解するのは困難であり、入局後の教育を必要とする。それでも先輩が多数いる職場に入職した薬剤師は恵まれており、独学での勉強を余儀なくされる薬剤師が少なからずいる。このテキストはそのような薬剤師にとって、医療の現場で薬物療法に貢献するために大変参考となる本である。

大阪府病院薬剤師会 (以下、病薬) が作成しているこの研修テキストは2003年に発刊され、2年ごとに改訂されており、量・質的にも洗練された内容となっている。この書籍の特徴は、とても見やすく構成されていることである。第2章の法規概説では図を多用し、

大学で学んだ薬事法規が病院での業務にどのように関係してくるのかわかりやすく記載されている。また、処方解析では処方例を挙げ、処方解析の手順、コツのようなものも記載され、大学で学んだ薬理学、薬剤学を臨床でどのように活用するのかわかるようになっている。一つひとつの章を説明していくと字数が足りなくなるので省略するが、今回新しく追加された第11~13章の専門薬剤師の記載は薬剤師の間ではホットな話題であり、薬剤師免許を取得したばかりの人間には特に必要な項目である。多くの都道府県病薬の新人研修会でテキストとして活用していただきたい書籍である。

(城西大学薬学部医薬品情報学講座 大嶋 繁)